相模原殺傷事件判決

隠された優生思想 表出

死刑は被告と同じ論理

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

作家 辺見庸さんインタビュー

へんみ・よう　1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する―。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならない」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもう」ことができる入所者「きーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは痛みの中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまう」ことは、主体的にあるのではなく「気付いたらそうだった」という偶然によるものです。

▽偽　装

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染み渡っている。

▽本　音

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―えたいの知れない人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

わたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしていないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

Q「月」　寓意（ぐうい）に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版された。

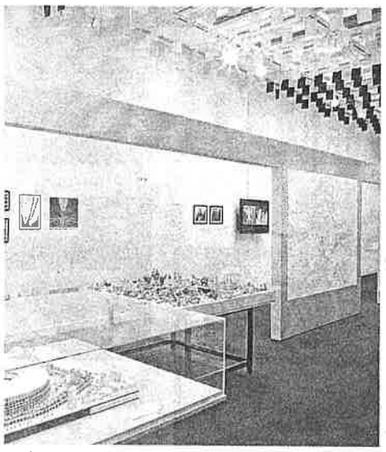
物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を見た者が「ありきたりの〈善意〉」から発する「おさだまりの文言〈オキノドクニ…〉」や「あからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。

「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは「だれよりもそっちょく」な職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日「〈敵対者〉の空気」をまとってやって来る。

見聞録　建築

ニューヨークの日米交流団体「ジャパン・ソサエティー」のギャラリーで「メイド・イン・トーキョー　建築と暮らし　1964／2020」展が開かれた。東京・新宿駅、中銀カプセルタワーとカプセルホテル「ナインアワーズ浅草」、東京・晴海の高層アパート「ナインアワーズ浅草」や現代美術家の風間サチコらの作品も入れて、都市に対する批評的な視点を組み込んだことも興味深い。

「1964」のパートは、吾の国立競技場、新旧の大胆かつ前衛的なデザインの傑作が並ぶ一方で、まだ歴史の評価が定まっていない「2020」はリノベーション、複合施設、



ーキョー」に展示された国立競技
Richard P. Goodbody. Courtesy o
ery)

発見できるように」

大阪市が2021年度に開館する「大阪中之島美術館」（同市北区）の館長に就任した菅谷富夫さん。「観覧者一人一人が自分なりの面白さを発見できるような美術館に」と抱負を述べる。

「30年分の期待と重い責任を実感する」。1980年代に「市立近代美術館」として構想が発表されたんは92年から建設準備室の学芸員として携わってきた。収蔵品の寄贈者に「『自分が生きている間にはできないのかな』と言われたこともあった」と振り返る。

バブル期に多くの公立美術館が開館する中、市は「コレクションありきの美術館をつくる」と建物の建設よりも収集を優先。

60代、70代、80代の
サントリーの『ロ

「何歳からでも
筋肉成

Q 市毛さんが『ココモア』を始めたきっかけは？

A 歩みに自信が欲しくて。何歳になっても自分の力で歩み続けたいなって。

山登りを始めて29年、いつまでもしっかり歩みたいと感じています。でも、歩みに大切な「筋肉成分」と「軟骨成分」は年齢とともに減ってしまうんですよね。補えるものがあれば助けてほしいなと。

A　Q